

日本文学研究資料叢書

近代女流文学

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

近代女流文学

岡本かの子・林芙美子
平林たい子・佐多稲子

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

近代女流文学

定価 3200 円

昭和 58 年 8 月 20 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話03(291)1521~3 番

振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30093-X C3393

目次

岡本かの子

岡本かの子追悼……………一

岡本さんを悼む(武田麟太郎)ノ追悼(林房雄)ノ岡本かの子(川端康成)四

天才的な作家——岡本かの子の遺作「生々流転」……………小林秀雄…七

「現代日本小説大系」53 解説……………伊藤 整…九

かの子変相……………円 地 文 子…二四

かの子覚え書き(1)(2)……………平林たい子…三

遠景のなかの岡本かの子……………小久保 実…三

岡本かの子と堀切茂雄……………熊 坂 敦 子…三

岡本かの子序説……………川 端 康 成…三

川の妖精……………亀井勝一郎…五

岡本かの子……………石 川 淳…六

林 美 美 子

「蒼馬を見たり」評……………上田文子・尾崎翠・八木秋子…三

世評と彼女——林美美子のために……………平林たい子…五

市民文庫『晚菊』解説……………	三島由紀夫…七
林さんの作品……………	田宮虎彦…六
林さんの小説……………	河盛好藏…八
林芙美子の人と作品……………	椎名麟三…四
林芙美子「晚菊」について……………	川副国基…六
林芙美子論……………	藤川徹至…六
林芙美子論……………	中村光夫…六
新潮文庫『茶色の目』解説……………	芝木好子…四
宮本百合子・林芙美子の文体……………	草部和子…一六
―その散文性と叙情性―	
『日本文学全集』20『林芙美子集』解説……………	竹西寛子…二四
雨の表現にみる感情移入について……………	今村潤子…二三
―「浮雲」を中心に―	
林芙美子、出生の謎……………	和田芳恵…三
平林たい子	
「治療室にて」―平林たい子短篇集―……………	黒島伝治…三七
平林たい子論……………	中野好夫…四〇

平林たい子論……………壺井繁治…一六

平林たい子論……………青野季吉…一六

平林たい子断想……………円地文子…一五

平林たい子氏と笑い……………河野多恵子…一七

平林たい子さんへの記憶……………若杉 慧…一八

― 鬼子母神 世に凄まじき 女なる哉 ―

『平林たい子全集6』 解説……………奥野健男…一八

『平林たい子全集1』 解説……………瀬沼茂樹…一九

平林文学の地平……………松田 修…一九

『平林たい子全集10』 解説……………佐伯彰 一…二〇

たい子とかの子……………勝又 浩…二〇

評価の変わり……………杉浦明 平…二二

佐多稲子

窪川稲子さんの「牡丹のある家」を読み……………江口 渙…二四

「くれなる」に就ての覚え書……………徳永 直…二七

窪川稲子論……………青野季吉…三三

展開まえの低迷——佐多稲子「私の東京地図」について……………小原 元…三三

「くれなる」について……………中野重治…三九

一閃のニヒリズム……………本多秋五…四〇

著者を語る「灰色の午後」の佐多稲子さん……………野間 宏…三六

「灰色の午後」論——一粒の主観・その他……………湯地朝雄…三六

『日本文学全集』39『佐多稲子集』解説……………佐々木基一…四三

『塑像』についての感想……………渡辺澄子…四四

佐多稲子論……………坂本育雄…四四

素足の娘 〈佐多稲子〉……………草部 和子…三七

佐多稲子……………久保田芳太郎…六一

佐多稲子ノート——その文学発想……………長谷川 啓…六五

「素足の娘」・「樹々新緑」における佐多稲子の二重性……………小林裕子…六六

*

解 説……………尾形明子…四四

近代女流文学主要研究参考文献……………尾形明子…三二

岡本かの子／林美美子／平林たい子／佐多稲子

執筆者一覧……………三六

岡本かの子追悼

岡本さんを悼む

武田 麟太郎

「文学界」同人は殆んどすべてが岡本かの子さんの作品を敬愛してゐたと思ふ。殊に、林房雄などは、岡本さんを、鷗外、漱石に次ぐ大作家だとしてゐる。私も驥尾に付して、岡本さんの熱心なファンであつた。ひいきにしてゐて下さるんで、私は本當にありがたかったですよ、と岡本さんはよく言つたがそのひいきにちがひなかつた。昨年あたりの岡本さんの業績は燦然と眩いものがある。

「東海道五十三次」、「老妓抄」それからとうとう未完成に終つた「丸の内草話」など。人は死ぬ前にはこんなに輝かしく光るものか。とすれば、私などは駄小説を書いて、のんびんだらりと長生きがしたい。

岡本さんは、本當の意味の小説家であつた。日本では文学家や芸術家はゐても、小説家は実に少ない。岡本さんはその稀いうちの、しかも最もすぐれた一人であると思ふのは、いつも私の口癖である。その死を突然聞いた私は一日中、心が沈み込んだり、荒たりし

て困つた。

ほんの三四年前だが、まだ「鶴は病みき」を書いた當時はこんな今まで高い境地に到達するとは、私は考へてもゐなかつた。青山のお宅で、私、小説家になれるでせうか、と腹臍のないところを云つてくれと、真剣に問はれて、困つたことがある。

私としては、もつと人が悪くて、世間ずれしてゐなければ小説など書いて行くのは無理ぢやないかと考へてゐた。

だが、岡本さんはぐんぐんと書いて、巧みな作家になつて了つた。その作家としての速度は実に早かつた。それにはわけがある。日本の大多數の作家は、年少から書きはじめ、自分と云ふものの成長に従つて作家的修練を加へて行くので、その期間はどうしても永くかかるのだ。

ところが、岡本さんは年齢も人間もある到達点に達してから、小説を手がけはじめた。だから作家に必要欠くべからざる高い人間的

根柢は出来上つてゐるので、あとは技術の進歩だけである。おまけに岡本さんは歌人であつた。それで詩の精神を知り、しかももつと大きな自己表現を求めて、その狭さから脱し散文へ走つたのだとすれば、技術についても整理されてゐなかつただけである。

だが、日常の岡本さんを知つてゐる者は、あのやうに世間の色々を書きわけて行つたその見聞や知識の広さに驚くにちがひない。

私も不思議でならなかつた。

去年の暮、有楽座でお逢ひした際、どうしてあんなになんでも知つてゐるんです、見かけたところは、何も世の中を知らない奥様、と言ふより無邪気で大まかなお嬢さんとしか私の眼にうつらないんだが、と無礼なことを言つたことがあつた。

すると、岡本さんも恥しさうに笑つて、小首を傾け、自分自身も不思議でならない、生活者としては不能に近い自分だが書きはじめ

追 悼

二月二十四日の夜、青山高樹町の暗い露地を、私は川端さんの後について、歩いて行つた。何度も歩いた露地である。岡本さんの玄關側の客間には明々と灯がついてゐた。何事もなかつたやうな灯の色であつた。田舎道の提灯の灯のやうでもあつた。森の奥の月魂のやうにも見えた。露路を歩きながら私は、いつものやうに、川端さんと二人で、生きてゐるかの子さんのところへ遊びに行く、途中の

ると、ペンの先きから種々雑多な具体的事実が流れはじめ、そんなこと知つてるとは自分でも気づかないことが、小説の進行のうちにひよこひよこ躍り出て来るんだ、と言つたやうなことを語つた。私は、

「あなた天才だ。」

と言つた。まことに、小説の天才である。

その夜は疲れてゐるらしかつた。あんなに仕事をしては当然だと思つたが、芝居を見ながら居眠りしてゐるさまは、寧ろ、今から思ひ出せば、寂びしい翳がありすぎた。

その時、あの「老妓抄」の結末の歌「年々にわが悲しみは深くしていよゝ華やぐいのちなりけり」を書いて貰ふ約束したのだが、もう空しくなつて了つた。私はこの歌が好きだ。

林 房 雄

やうな気持がして来た。その気持を、私は口に出した。川端さんは何も答へなかつたやうである。答へても、詮ないことにちがひなかつた。

客間の入口には花環が沢山ならんでゐた。白い花を黒いリボンで結んだ花環であつた。花環は教へてくれた。「岡本かの子さんはやつぱり亡くなつたのだ。」

客間の正面の白い台の上には、遺骨の箱も位牌もなかった。淡紅の薔薇の花環に飾られた写真と白い中指ほどの水晶の観音像が置いてあるだけであつた。

岡本一平さんは写真と向ひ合つた椅子に腕組みをして坐つてゐた。両側に山本実彦氏と川端夫人がゐた。

私たちは焼香した。その間に、山本さんが帰つた。川端さんと私は一平さんをはさんで坐つた。どのやうに話をはじめたかは覚えてゐないが話してゐるうちに、一平さんの姿が、片身をそがれながら生きてゐる魚のやうに痛々しく見えはじめて来た。

「どうして知らせてくれなかつたのです。初七日まで喪を発表しない習慣はどこにあるとは聞きましたが……」

私の問いに答へて、一平さんは、そんな形式に従つたのではないと言はれた。七日間、堪えに堪えて、どうやら人に会へる気持をとるかへすことが出来たので、それ以前に故人の知友たちの顔など見たら、自分の身体も心もばらばらに壊れるやうな気がして怖しかつた。告別式をしなかつたのは故人の意志に従つたので、もしかの子さんが生きてゐて、自分で自分の葬儀を行つたら、どのやうにするだらうかと、たと故人の気持を追ふことで、この七日間をすごした。

かの子さんは色々な不思議な悟りを身につけてゐた人であつて、死といふことに就いても、常人と異なる解釈をもつてゐた。それは高僧の悟達にも似てゐたし、淨い童女の無思にも似てゐた。この人に、ありきたりの葬礼の形式をもつて対することは、岡本一平さんはどうしても出来なかつた。

かの子さん自身なら、どうしたであらう、と我が心をかの子さんの中に置き、かの子さん自身に自分の葬礼を行はせるつもりで、すべてをとり行つた。それが一平さんにとつての唯一の救ひであつ

た。「告別式などはいや。私の葬式はあなたと二人きりで沢山よ。」と何時かかの子さんが言つたことがあるさうだ。一平さんはそれに従つた。

「火葬はきらひ。死体を焼くのはおかしい。」

一平さんは、その言葉を思ひ出して、それに従つた。土葬の習慣は現在どの寺にも殆んどないのだが、頼んで土葬にしてみらつた。かの子さんは武蔵野が好きであつた。生れたのは多摩川のほとりである。岡本家の寺系にしたがへば、千葉に埋めなければならないのだが、敢て武蔵野に墓地を探した。

告別式の費用は傷病兵のために寄贈した。岡本さんは幾度か陸軍病院を訪れ、自分の病中にも、傷病の兵士たちのことをしきりに口にしてゐたことを、一平さんがおぼえてゐたからである。

喪を置すつもりではなかつたが、進んで人に告げる気持は起らなかつた。一平さんとかの子さんのただ二人きりの幾日間かゝ過ぎ、一平さんの中に再び生きる力がわずかに蘇つて来た頃、新聞社が知つた。知友たちが訪れはじめた。死んだかの子さんの前で生きてゐる知友たちに会ふことは堪えられない気持が再び起つた。だが、会つてをれば、いくらか気の晴れる点があることも解つた。

贈られた花環は白かつたが、一平さんはかの子さんの写真だけは淡紅の薔薇の花で飾つた。写真もベルリンで写した童女に似た面影のを選んだ。写真の前には、水晶の観音像のみを置いた。

一平さんはワカメの味噌汁を食べる。かの子さんの嫌ひな食物であるからだといふ。かの子さんが好きなものであつたと思ふと、どんな食物も喉をとほらない。思ひで胸が一杯になるのだ。

一平さんは今一度かの子さんに会ふ。今一度必ず会へるといふことが、一平さんの現在の命の綱だといふ。今度会ふときまでに、か

の子さんに負けないだけの立派な人間になつてゐるつもりだと言はれた。生きてゐる間は、かの子さんを乙女のやうに思ひ、童女のやうに思ひ、妹のやうに思ひ、すがらせ導いてゐる氣でゐたのが、今になつて始めて、すがつてゐたのは自分の方であり、導かれてゐたのが自分の方であることがわかつた。その逆であつたことが、取りかへしのつかぬほど残念なことに思へる。再びめぐり会ふ日まで、立派な修業をしておきたい。そのためには、再び絵の修業に帰ることが道かもしれない。

(私の筆は、岡本一平さんの氣持の千分の一も映し得てゐないやうだ。ある部分はあやまり伝へてゐるかもしれない。今はまだ書くべき時ではなかつたかもしれない。だが、書かずにはをれなかつた。許していただきたい。)

話の終るころ、一平さんは私の顔色を見て、ビールを飲むかと言つた。いただきませうと私は答へた。無論、飲んだのは私だけであつた。

岡本かの子

今はハワイにある友人三明永無君に誘はれて、岡本さんの家を訪ねたのが、会つた初である。一高の寮からであつたか大学にゐた頃か、ちよつと思ひ出せない。とにかく二十年ばかり前で、私にはそのやうに古いかの子さんである。

「もしも飲めたら、あなたもお飲みになつたでせうか。」私は訊ねた。

「飲んだかもしれない。」一平さんは長い間酒をやめてゐる。

「だが、飲んだら、飲みつづけたにちがひない。醒めるのが怖しくて……」

時間は遅かつたが、お悔みの客が来た。黒田米子さんであつた。私はビールのコップに氣がつき、たいへん不謹慎であつたと思つた。一平さんはそんなことは氣にもしない人であらうが、もしも一平さんが飲んだと思はれては相済まないと思つた。そして、ビールを片づけてもらつた。

黒田さんが帰ると、一平さんは言つた。

「どうもいけない。男の友達はまだいゝが女の友達の色を見ると、やつぱり駄目だ。」

帰りの車の中で、川端さんは、「寒くなつた」と言つた。

その晩、私はいつもより酒をすごした。

川端康成

私達の「新思潮」を、二度目に本郷白山の南天堂から出した時は、同人外原稿ももらふことになつたが、横光利一君や中河与一君などと共に、かの子さんも書いてくれた。確か戯曲であつたと思ふ。

かの子さんは「新思潮」といふ伝統的な同人雑誌名に、格別の親愛を寄せてゐた。亡兄への追慕が、それに籠つてゐたからである。かの子さんの兄さんは、谷崎潤一郎氏と同期の「新思潮」同人、大貫晶川氏である。

かの子さんがいよいよ創作一筋の心を固めて、私に初めて見せた小説は、「或る時代の青年作家」と題し、この晶川氏と潤一郎氏との交友を書いたものであつた。名妓万竜の恋愛もそのなかに折り込まれてゐた。晶川氏の日記風な手記が、沢山抜き書きしてあつたので、この人の性根を知ることが出来た。明治の末の青年の人生と芸術の悩みが、よく現れてゐた。この日記だけ、独立させて発表しても、相当面白いものだと思はれた。花々しい新進作家時代の谷崎潤一郎氏の風貌もかの子さんはよく書いてゐた。

晶川氏にはツルゲエネフの「煙」の翻訳がある。美しく弱くて、心の細かい人であつたらしい。強く太い線の潤一郎氏とは対照的で、そのやうな谷崎氏に圧されがちであつたらしい。かの子さんは、若い日の思ひ出も心にあつて、現代の作家では潤一郎氏を最も尊敬してゐたやうである。昔の人では紫式部であつた。

「或る時代の青年作家」は、昨年か一昨年頃、改作されたのをもう一度読んだ。しかしこの材料は、一平氏とのこの世ならぬ美しい夫婦生活の材料と共に、かの子さんの一生のうちでも貴いものである。もつとみごとに熟する日を、私は待ちたかつた。折にふれてちちらと聞く、かの子さんの少女から新妻にかけての頃の話の思ひ合せると、いづれ類稀な名作が生れるにちがひなかつたが、これも未完成のままになつてしまつた。

かの子さんが作家として立たうとしたのには、亡兄の遺志を果すといふ気持も強かつた。かの子さんは幾度も私にそのことを言つた。かの子さんは子供の時から常人と變つてゐて、間抜けでもあつたが、天才的なものを多分に見せてゐた。晶川氏はこの妹を愛し、若く亡びる自分の命を、妹に流しこむやうな風であつたらしい。かの子さんの文学の目覚めには、この兄さんの感化も少くない。しかし、かの子さんの生命力は豊饒で、その点亡兄より寧ろ潤一郎氏に通ずるところがあり、更に高く深いものがあつた。

創作は初恋であり、また失恋であるとの意味を、かの子さんは私によく言つた。一平氏もその志に、真実の「あはれ」を汲んで、よく助けられたものである。かの子さんの小説を晩学と見る人もあらうが、その勉強は少女の頃から今まで貫かれて来たのである。その「恋」もやうやく遂げられたと見える昨年あたり、「どうだい、もう止めないのかい。」と、たゞ一こと一平氏が言ふと、かの子さんは話してゐた。さうして、忽然と逝つた。

私に相談され、かの子さんが本腰に小説を書き出さうとして、原稿を見せるやうになつたのは、昔の「新思潮」からの因縁によるが、爾来数年間、一平氏ともども、終始私に注がれた礼讓と感謝とは、まことに尊いものであつた。自分がそれに値しないことを、いつも恥ぢてゐたが、それは私の一生のうちでも、ありがたい誇りとなるであらう。私は随分多くの後進の原稿を見て来たが、かの子さんと北条民雄のやうに、私を信じてくれる人は、今後もありないであらう。それが二人とも、一年ばかりの間に、死んでしまつた。

かの子さんが「文学界」につくしてくれたのも、初めは「文学界」が私達の「新思潮」の続きのやうに思へたからであつた。あの「文学界賞」は、かの子さんが出してゐてくれたものである。その頃「文学界」は新聞広告も出せないのを寂しがつて、朝日新聞の広告を毎月寄付しようといふのを、横光君の発案で、賞の方に使はして貰つたのであつた。賞はかの子さんの意志でなかつたので、匿名の寄付とした。

それから「文学界」は種々好意に甘へるので、はらはらしたぐらゐであつた。同人会にかの子さんの家を借りたこともあつた。そのためにかの子さんは、洋間を畳の部屋に模様替へした。しかしそのことは黙つてゐた。

○

作家としてのかの子さんは、いはば私の肉身に近い人であつた。

友人としても、もし私が困つてなにか頼めば、一平氏といつしよになつて、どんなことでも聞いてくれるにちがひない人であつた。さういふ場合のかの子さんは、こちらがこはいほど美しい心であつたから、減多に迷惑もかけられぬが、私はこの夫妻を頼りにしてゐた。今は自分の血肉を削られたやうである。

かの子さんはちよつと見たところや、世間の噂とは、随分ちがつた人であつた。いづれそれを書く折もあらう。この人の豊かな花やかさとともに、言ひやうのないさびしさや、あはれさや、遠く高いあこがれも、その幾分は作品に現れてゐる。このやうに深く大きい女の人は、今後いつまた文学の世界に生れてくれるであらうか。惜しいことをした。

（「文学界」昭和一四年四月号）

天才的な作家

——岡本かの子の遺作「生々流転」——

小林 秀雄

手近な例を取つても、書下し長篇などにしても、本来は作家が、ジャアナリズムの要求に反抗し自由に創作したい気持が先づ当然なければならなかつたのだし、事実初めはさういふ気持があつたのだが、これも勢ひの赴くところ何が何やら解らぬ事になつて了つた。書下し長篇全集が現れれば、書下し長篇雑誌などといふ意味のない

ものまで出現し、勢ひだから作家も書かないわけには行かず、書き下しで物を考へる暇もなくなつて了つた。かういふ勢ひを、誰が何とも出来るものではない。行く所まで行く、十年後に残るものが残つたといふ事になればそれでいゝ。尤も反動は意外に早からう。

最近の長篇小説で、僕の心を読後感で一杯にしてくれたのは、岡本かの子氏の遺作「生々流転」であつた。恐らくこれは未定稿でもあり、未完でもあるが、たとへ定稿完結といふ事であつても、作者は、沢山の半ば無意識な破綻を残したと推察される。それほどこの作の意図には烈しく、切羽詰つたものが感じられる。作者の心持が溢れて、作の構成を乱してゐるのだが、その乱れ方には、作者の精神が本當に強ければ、かういふ乱れ方はしないといふ風な弱さが見えるが、一方その弱さには、何といふか、女の一念といった様なも

のがあり、又、作者の言葉を借りれば、「女が決心して女を離れたくらゐ、自分にも他人にも平気で残忍を行へる人間はない」といふさういふ残忍さが交り、一種捨身な強さが感じられ、不思議な印象を受ける。ともかく月並な退屈な小説鑑賞といふものから、僕を引摺り出して、生き／＼と夢想させてくれる力を藏してゐる。

「生々流転」といふ題の示す通り、これは恐らくひたすら人間の命の姿をもつと問近にもつと純粹にといふ風に目がけて絵巻様なものが描けると自信した作である。

「いのちの為にはあれも無駄、いのちの為には之も虚飾」といふ観念は、この作では非常に執拗なものだが、その為に、作者は、世間並の恋愛も友情も無駄であり、虚飾であると自分も感じ人にも感じさせる様な、精緻に加工された一女性を主人公として登場させ、或る時は驚くほど真実に或る時は驚くほど輕薄に組立てられた恋愛關係、友情關係のうちを泳がせる。

かういふ仕組みの小説は、作者の意図する意気込みを裏切り普通、凡庸な観念小説に墮し易いが、岡本氏の場合では、その非凡な肉感性が、これを救つてゐる様に思はれる。

この作者には、恐らく天賦といへる様な豊かな抒情と瑣事の観察の才があり、さういふ才能が、観念上の分析の、切実だが破綻に充ちた進行に伴つて、之は又完全に見事に進行する。これは一種不思議な美しさだ。この作は、僕には一種の呪文めいて感じられる。いのちに関する思想といふ様な堂々たるものではない。又、祈りといふ様な静かなものでも謙虚なものでもない。言葉には新しいものがあるが、味はひには原始的な、一念を掛けたと云つた呪文の様な印象が残つた。作者は、賭けたのである。救はれるか救はれないか自問自答の形で賭けたのだ。もつと云ひたい事もあるが亡くなつて了つては詰らない。

〔東京朝日新聞〕昭和十五年一月二五日発行

「現代日本小説大系」53 解説

伊藤 整

岡本かの子は、小説家として活躍したのはその生涯の最後の四年間ほどのことであつて、それ以前は歌人としてまた仏教研究家として知られてゐた。岡本かの子の研究家岩崎吳夫氏の調べによると、

その生家大貫家は、大和屋と号し、東京都世田谷区が川崎市と多摩川を隔てて接する辺、二子玉川在の名家だといふ。明治二十二年（一八八九年）、大和屋の寮であつた赤坂区青山南町の家に、長女として生まれた。跡見女学校に学んだ。次兄大貫晶川（雪之助）は谷崎潤一郎と中学時代から大学までの学友であり、同人雑誌第二次「新思潮」に共に関係してゐた。潤一郎を中心とする第二次「新思潮」の同人たち後藤末雄、和辻哲郎などの交友の作り出す雰囲気、岡本かの子が深い影響を受けたことは明らかであつて、現代日本文学で彼女の作風に最も近い作家を求めれば谷崎潤一郎を挙げる外ないのである。

かの子は兄晶川を通じて特に彼の愛好したツルゲーネフ、トルストイ、ドストエフスキイ等ロシアの近代作家に親近した。「ある時代の青年作家」なる短篇には、「新思潮」時代のこれ等青年文学者たちの姿が描かれてゐる。それはまた谷崎潤一郎の「青春物語」か

らも迎ふことが出来る。かの子は兄晶川の指導を受けてゐた少女時代、大貫野薔薇といふ筆名で、「文章世界」、「女子文壇」、「万朝報」、「読売新聞」文芸欄等に盛んに投書してゐたといふことである。それが明治三十八九年の事である。

明治三十九年（一九〇六年）かの子は兄晶川とともに、与謝野鉄幹、晶子の「新詩社」に加はつて、その機関雑誌「明星」に短歌を発表した。明治四十一年十一月「明星」廃刊後は、「スバル」に短歌を発表した。跡見女学校卒業後、馬場孤蝶の主宰する闊秀文学塾に通ひ、またこの頃、平塚雷鳥、山川菊栄、茅野（旧姓増田）雅子、長谷川時雨等の若い女流芸術家たちと知り合つた。

明治四十三年、二十二歳にして、岡本一平（明治十九年六月生れ）と結婚して、青山北町に住む。翌四十四年長男太郎誕生。平塚雷鳥等の「青轡社」に加はる。この頃より一平は漫画界の流行児となり、朝日新聞に關係す。大正元年（一九一二年）処女歌集「かさねたみ」を青轡社から発行した。大正二年から四年にかけて、芸術家同志の夫婦生活の矛盾に起因する生活破綻に直面し、かの子は強度の神経衰弱に陥つた。大正五年頃から夫婦生活の調和を強い意

志をもつて、夫と妻と両方が考へるやうになり、かの子は植村正久についてキリスト教に入り、その後親鸞を読むことによつて仏教に入つた。この頃から約十年間、本格的に仏教の各派にわたつて研究を続けた。六年、兄晶川は病歿し、深い打撃をかの子に与へた。

大正七年（一九一八年）第二歌集「愛のなやみ」を刊行した。大正八年頃から禅に共鳴し、原始仏教を研究し、また大藏經の閲読を始めた。大正十年前後から川端康成、芥川龍之介と知り、戯曲の制作を試み、かつ小説の制作を考へるやうになつた。大正十四年歌「さくら百首」を中央公論に発表、第三歌集「浴身」を刊行した。

昭和二年から三年にかけ、約一年間読売新聞に仏教についての感想「散華抄」を連載した。四年五月「散華抄」の外に「阿難と呪術師の娘」、「寒山拾得」、「ある日の蓮月尼」等、三篇の戯曲を加へて単行本「散華抄」を刊行した。この三篇の戯曲は仏教思想を中心としてゐるが、それぞれ作者の体験の裏付けを感じさせ、仏教によつて得た生の認識の強い支えを持つてゐる。方法的に言へば骨組みが目立ち、かつこの作者の場合長所にも欠点にもなる派手な裝飾意識が内容と融和せずに加へられてゐるので、散文の制作としては十分なものと言はれない。この年歌作と別れて散文芸術に進む決意をし、「わが最終歌集」を改造社から出版し、同時に夫と息子と三人でヨーロッパへの旅に出た。

昭和五年から朝日新聞社員としての仕事を持つ夫とロンドンに居住し、かたはらヨーロッパ各地に旅をした。七年六月アメリカを経て帰朝した。八年（一九三三年）紀行文集「世界に摘む花」を刊行。物語紀行文集といふ副題を持ったこの本は、内容を仏蘭西篇、英国篇、独逸その他の三部に分れた旅行見聞記であるが、中には多くの短篇小説的な独立した作品を含み、その他の部分も人事風物の

描写は意識的に小説の手法を使つてゐる。特にパリ生活を描いた諸篇は、艶美で多彩なかの子一流の散文文体を形成してゐる。

その後彼女が小説で駆使して世を驚かしたあの美しい散文、時としてはその短歌表現から出て来た美文調が正確な思想表現を妨げ、作品の弱点となることもしばしばあつたあの散文は、この時期に出来たもののやうである。小説「巴里祭」はこの書物の「仏蘭西篇」の小説化と言つていい。

昭和九年、仏教に関する講演、ラジオ放送等のために多忙な日を送る。この頃から後に刊行された仏教関係の本には「仏教読本」（後に「人生読本」と改題）、「観音經を語る」、「綜合仏教聖典講話」（後に「光をたづねて」と改題）等がある。この年、禅を主題にした短篇小説「鯉魚」を「禅の生活」に発表。多分これが最初の小説である。また随筆集「かの子抄」を出版した。この本は西洋見聞記、仏教についての感想、女性問題についての随筆といふ風に分けられてゐる。そしてこの時期に彼女が自己の新しい生涯の樹立を強く意志したことは、その序文からもうかがはれる。即ち、

「ひとたび、稍々完成しかゝつた私を解体して歐洲遊学の途にのぼつたのは、今から六年前、すなはち昭和四年の秋であつた。それから昭和七年春、欧米の旅から帰り、母国に於けるまる二ケ年の歳月を経た。

「解体した後の私が、徐々にまた新しい私を打ち建て始めようとした最近六ケ年間のひたむきな生活から探求し得た素材は何か？『かの子抄』に於て先づその素材の一部分をお目にかけ得る。

『かの子抄』は『将来の私』といふ本建築の前に建つべく当然の必要とされた『第一の門』である。